

生きる意味を回復するために ——対人援助を社会的に読み解く——

浅 川 達 人

1 生きる意味を見失いがちな対人援助職

医療・福祉・教育など、他者に対する援助を行っている専門職を、広義の対人援助職とした場合、今日の対人援助の現場では、対人援助職の専門家たちが、自分の存在価値が薄れ、専門職として生きていく意味を見だしにくいと感じることが少なくないという。患者・利用者・児童・生徒のために働けば働くほど、対人援助活動から疎外されていくのはなぜか。現場で働く対人援助の専門家たちが生きる意味を回復するためには何が必要か。それを描き出すのが本稿の目的である。

2 教育の現場で進行していること

(1) 分数の割り算

今日の教育現場、特に小中学校で行われている教育の特徴を最もよく表しているのが、分数の割り算の教育方法であると考えられる。しかしながら、そう指摘されても、すぐに首肯する人は少ないだろうと思われるので、具体的に教育の場面を思い浮かべることから論を始めてみたい。

小学校低学年の児童に、6割る $1/3$ という演算の意味と解法を教えてあげてください。そのように依頼されたら、どのように教えるであろうか。分数の割り算という演算の「意味」を小学校低学年の児童に、すらすらと教えられる人は少ないのではないだろうか。その一方で、「解法」については、多くの人が次のように教えると答えるであろうと容易に想像される。「分数の割り算はひっくり返して掛けるんだよ」と。

(2) 割り算の意味

演算の意味がわからないままに、解法だけ覚える。そのように教え込まれる演算方法の典型例として、分数の割り算はあげられている。畑村は、割り算には3つの意味があると指摘している(畑村 2005)。ひとつ目の意味は、「分ける」である。例えば、56本のバナナを7匹のサルに与えるためには、1匹あたりバナナは何本となるだろうか。このような場面で用いられる演算が、 $56 \div 7$ という割り算である。2つ目の意味は、「比べる」である。ドレスリングを作るとき、酢とサラダオイルは○対△の割合で調合するとよい、というような場面で用いられる。これもまた、たしかに割り算なのである。

これら2つの意味は、なんとか思い当たる人もいるだろう。では3つめの意味とは何か。それは「何個あるか数える」という意味であると、畑村は指摘している。例えば、 $132 \div 49$ という割り算は、「132という全体の中に、49というかたまりが何個あるか数える」という意味をもつと考えればよいというのである。132から49をひとつ取り出すと残りは83。まだ49を取り出すことができる。そこで49をもうひとつ取り出すと残りは34。もう49を取り出すことができない。したがって、132の中に49は2つあり、残りは34となる。これが $132 \div 49$ の意味だということである。

(3) 割り算の意味と解法

この、割り算の3つ目の意味を用いると、分数の割り算の意味を理解することができる。先ほどの「6割る1/3」という演算の意味は、「6の中に1/3が何個あるか数えなさい」という意味となる。したがって、解法は、次の通りとなる。「1の中には1/3は3個ある。6とは1が6個集まったものである。したがって、6の中には1/3は、 $6 \times 3 = 18$ 個あることになる」。

このように、分数の割り算の意味と解法をきちんと伝えることは可能である。しかしながら、このようにゆっくり教えている時間的余裕は、残念ながら現在の小学校には無い。意味を理解させようと教員が努力したとしても、児童・生徒全員がその教員の教育の意図を理解できる前に時間切れとなるため、やむなく「分数の割り算はひっくり返して掛けなさい」と伝えて終わりにせざるを得ないのであろう。

(4) 意味がわからなくても学ぶ必要がある

分数の割り算の例を出すと、多くの人々が、教育においては「意味を理解することが必要不可欠である」と考えるようになる。確かに「意味を理解することが必要」となる場面も少なくない。分数の割り算などは、その最たるものであろう。しかしながら、今現在は意味などわからなくても、とにかく学んでおかなければならないこともまた、教育にはあるのである。

九九を覚えたときのことを思い出すとよい。九九の意味などまったく理解しないまま、とにかく丸暗記で九九を覚えたはずである。そうやって丸暗記したおかげで、その後の計算が格段に容易くなったのである。九九の意味がわからないから学ばないとか、九九が何の役に立つのかわからないから学ばないとか、そのように言葉で逃げる前に、覚えなさいと先生や親にいわれ、やむなく覚えたのではないだろうか。

このことは、我々が現在有している知識や経験ではその意味を十分に把握することができないようなことがらをも、学ぶ必要があることを示している。我々が現在有している知識や経験を、たとえば30cmの物差しだと考えよう。それで体重を量ることもできなければ、視力の測定もできはしないのである。

にもかかわらず、我々は、明日の診療・治療・看護・介護・教育活動に役立つと思うことができる知識や情報には耳を傾けるものの、現在の私にはそのように思えないことがらについては、意識を向けることができない。そう思い込んでしまう傾向があるのではないだろうか。

(5) 「意味」という概念の多様性

前述した通り、意味を知らずに学ぶことはむなしい。しかしながら、たとえ意味がわからなくても学ぶ必要があることは、多々ある。このように書いてしまうと、伝えたいメッセージが伝わらず、混乱したイメージのみが先行してしまう。そのような事態を招く原因は、「意味」という概念の多様性に求められよう。

意味を知らずに学ぶことはむなしい、という場合の意味とは「内容」もしくは「内実」を示している。「6割る1/3」という演算の意味を知らずに解法だけ覚えるという学習はむなしい、という表現は、むしろ「6割る1/3という演算の内容／内実を知らずに解法だけ覚えるという学習はむなしい」というように換言した方が誤解無く伝わるであろう。

一方、意味がわからなくても学ぶ必要がある、という場合の意味とは「価値」を示している。したがって、換言するなら「価値がわからなくても学ぶ必要がある」ということになる。

だとするならば、対人援助の専門家が失いつつある「生きる意味」とはなにか。生の内容や内実ではないので、「生きている」もしくは専門家として「存在している」ことの「価値」を失いつつあると、解釈することができる。専門

家として、どのような「価値」を失いつつあるのか。なぜ、失いつつあるのか。どうしたら回復できるのか。それらについては、もう少し、論を進めてから再考したい。

3 対人援助の現場に浸透する経済活動のことば

(1) 子どもの言い分

再度、教育の現場に立ち戻って、子どもたちの言い分に耳を傾けてみよう。件の分数の割り算を教える場面に立ち会うならば、子どもたちの言い分はこうである。「分数の割り算は何の役に立つのでしょうか」「電卓があるのだから、分数の割り算なんてできなくたって、ちっとも困りません」「席について先生の話をも黙って聞くという苦役に見合う『価値』があると思えるなら聞きもしませんが、思えないから聞きたくない」と、だいたいこのような反応となる。

子どもの言い分からは2つのことがわかる。ひとつは、教育という苦役を受ける「義務がある」と見なしている点である。そしてもうひとつは、学ぶ「価値」を理解できないから学ばないという態度表明にある（内田 2007）。

義務教育とは、子どもに教育を受けさせる義務が親にあるのであって、子どもに教育を受ける義務があるなど見なすものではない。むしろ子どもがもつ、教育を受ける権利を守るために定められたのが義務教育制度だったはずである。

なぜそのような変化がみられるのか。重要な点はむしろ2点目にある。すなわち、席について先生の話をも黙って聞くという苦役と、学びとを等価交換しようという姿勢に現れていると考えられる。苦役に見合う「価値」があると思えない場合、交換しようという考え方は、経済活動の考え方そのものなのである。

(2) 対人援助活動の現場

末期がんとなり終末期医療を受けている患者さんに対して、主治医は毎朝「痛みはどうか。痛み止めは効きますか」と尋ねる。身体への負担をなるべく少なくして効率よく疼痛を取り除いてあげたい、そう願って医師は声をかける。しかしながら、自分の死期が迫ってくる恐怖と向き合っている患者にとって、医師のその問いかけは、痛み止めの効果にしか興味・関心が向けられていないと映ることになり、医師への怒りとなってしまふ。医療・治療効果が有るか無いかという経済活動の言葉で、私の生を語らないでほしい。患者はそのように思うのではないだろうか。

介護活動もまた、介護保険導入以降は、経済活動の言葉で語られるようになった。1時間の食事介護は〇〇円、というように、行為の種類や時間によって秤量されることとなった。教育活動も事態は同じである。1時間半の講義を半期に15回提供することをもって2単位とする。休講した場合は、そのままでは2単位と等価とは言えないので、かならず補講をしなければならない。講義は、シラバスというあらかじめ提示されたメニュー通りに行わなければならない、などなど。これらの言説は、全て、教育活動を等価交換という経済活動の言葉で語るにより生じたものであると捉えることができる。

4 経済活動の言葉では捉えきれないこと

(1) 価値は不変である

等価交換という原則に基づく経済活動とは、どのような特徴をもつ活動なのだろうか。等価交換が成り立つためには、価値が不変であるという前提が必要不可欠となるという点が大きな特徴のひとつである。

どういうことか。価値が変化する場合を考えてみれば、すぐにうなづけるだ

ろう。たとえば、100円という値札が付いたノートを購入するために、レジにもっていったら300円になっていた（価値が変化していた）とするならば、等価交換に基づく経済活動において客は怒りだすことになるだろう。大学の講義において、シラバスに「レポート評価」と書いてあったにもかかわらず、実際には「試験を行う」となった場合に学生が怒りだすことの理合は、大学の講義を等価交換に基づく経済活動としてみることから生じるものと解することができる。

(2) 存在の価値の喪失

等価交換に基づく経済活動のことばで語られるようになった対人援助活動は、いつ・どこで・だれが・どのように行っても「等しく変わらない価値」の行為として秤量されるようになる。つまり、私が行う行為も、A氏が行う行為も「等価」な行為とみなされるのである。このとき、私とA氏は完全に代替可能な存在となるがために、私という存在の固有の価値が失われることとなるのである。

したがって、対人援助活動が、等価交換に基づく経済活動のことばで語られる限り、対人援助活動を行う専門職は、その活動から疎外されることとなる。今日、対人援助活動の現場で粉骨砕身している専門職は、その業務における評価という秤量システムにおいて対人援助活動から疎外され、業務をこなすパーツのひとつと見なされることとなり、私という存在の固有の価値を剥奪されることとなっているのである。

対人援助の専門職が、自分が専門職として存在することの価値を見失う契機は、それだけではない。対人援助の専門職は、「専門家」であるがゆえに、自分にできる援助は何かを常に探している。どんな状況におかれたクライアントが目の前に居たとしてもそのクライアントのために、自分にできることがないかをいつも探求する。そして、「専門家」として真摯に、自分にできることの

すべてを実行すればするほど、自分にできることはこれ以上何も無いという状況に追い込まれることになる。このときにも、自分が専門職として存在することの価値を見失ってしまうのである。対人援助の専門職が、必要な援助を探して行えば行うほど、必要な援助が減少し、自らの存在価値が低減するという負のスパイラルが存在すると言えよう。

5 生きる意味を回復するために

(1) 古典派経済学に対するマルクスの批判

経済活動のことは絡めとられていくことによって、対人援助の専門職が生きる意味を失っていくとするのであれば、生きる意味を回復するためには「経済活動のことは」以外のことを用意しなければならないことになる。それはいったいどのようなものか。社会学黎明期の頃を思い返してみよう（玉野2008）。

神の見えざる手、すなわち市場原理に基づく等価交換が富を社会全体に分配するという言説は、アダム・スミスに代表される古典派経済学の言説である。ところが、現実はその通りにはならず、逆に格差が拡大するばかりであった。この格差拡大のメカニズムを指摘したのが、カール・マルクスである。

話をわかり易くするために、現代に置き換えて説明したい。アルバイトとして雇われた労働者は、賃金と見合う労働をしない場合には、当然、解雇される。賃金とまったく同等の労働しかしない場合には、別の、賃金以上に働く労働者によって代替されてしまう。したがって、労働者は常に余剰価値を生み出すことになる。ところが、この余剰価値は決して労働者の手には渡らず、資本家によって搾取されてしまう。したがって、貧富の差は拡大されていく。そうマルクスは指摘したのである。

古典派経済学に対する批判は、それだけではない。古典派経済学では交換価

値の象徴である貨幣に注目して経済活動を捉えていた。しかしながら、人は、交換価値のみに着目して経済活動を行っているわけではない。切手マニアにとって、レアな80円切手は1万円の価値をももつのである。すなわち、交換価値としては80円にしか相当しないものが、使用価値としては1万円となるというようなことが頻繁に起こるのが現実であると認識すべきなのである。

等価交換に基づく経済活動において、価値が不変であるという前提があることは前述した通りである。この場合の価値とは、したがって「交換価値」のことに他ならない。では、使用価値とはどのような過程において決定されていくのか。その点については後述する。

(2) ヴェーバーの理解社会学

マックス・ヴェーバーは、資本主義の深化としての合理化は近代の宿命だと捉えていた。医師が医学的な知見（エビデンス）に基づいて効率的・合理的に治療方法を選択していくという方向性は、近代の宿命であり、否定することはできない。家族介護に期待することが叶わない社会となった現代社会において、社会システムにおいて介護活動を担っていくという方向性は止めようがなく、そのためには少ないマンパワーを有効に効率よく活用して行く必要が有る。それがよいとか悪いという価値付けの次元で議論するのではなく、立論の論理性に基づく議論を経たならば、合理化の進行の必然性と必要性を認めざるを得ない。

しかしながら、人には意味や理念に奉ずる瞬間が有るとヴェーバーは指摘する。痛み止めは嫌だけど痛みを止めてほしいと懇願する患者さんに対して、どう接すべきかと真剣に悩む医師や看護師。業務として、すなわち、交換価値に基づく合理的な判断では、悩む時間が無駄ということになる。にもかかわらず目の前の患者さんの願いに沿うようにしてさしあげたいと悩むのである。それはなぜかを、理解すること。ヴェーバーの理解社会学とはそのようなまなざし

であった。

(3) 社会を捉えることば

このように、我々は必ずしも、交換価値に基づく合理的な判断のみで、生活を営んでいるわけではない。我々の暮らしている社会に秩序をもたらすものは、経済活動、すなわち交換価値と合理的な判断に基づく活動のみではないのである。我々の社会を秩序づけている構造とはいかなるものか、またそのような構造が我々の行動の背後にどのように構築されているのか。それをこれまで綿密に追ってきたのが社会学である。その社会学に少なからず影響を与えた理論のひとつが構造主義である。

構造主義の騎手のひとりであったレヴィ＝ストロースの知見を概観してみたい。レヴィ＝ストロースはあらゆる社会に普遍的にみられる2つのルールがあることを指摘している。ひとつは「人間社会は同じ状態にあり続けることができない」というもの。もうひとつが「私たちが欲するものは、まず他者に与えなければならぬ」というものであった（内田 2002）。

同じ状態にあり続けることができない人間社会ではあるが、同じ状態にいることを回避するためにとる行動には2つの方向性がある。ひとつは絶えず新しい状態になることを志向する社会である。目標を設定し、そこに向かって効率よく努力を重ねていくような社会。すなわち、現代の我々が暮らす社会である。レヴィ＝ストロースはこれを「熱い社会」と呼んだ。

それに対して、新しいことは全く生じないものの、過去から繰り返しとられてきた（その意味では伝統的な）活動を繰り返し繰り返し、未来永劫と続ける社会も、一方では存在するのである。贈与と返礼の往還が綿々と続くような社会。これを「冷たい社会」と名付けている。

(4) 対人援助が生きる意味を回復するために

このレヴィ＝ストロースの知見を発展的に援用するならば、対人援助活動は、等価交換に基づく経済活動のみとして捉えるのではなく、贈与と返礼の無限の往還として捉えるべきである、と考えることができそうである。換言するならば、対人援助活動を「業務」としてのみ捉えるのではなく、援助をする者も援助を受ける者も、彼ら・彼女らを取り巻く人々も、贈与と返礼の無限の往還に参画していると捉えるのである。

「業務」に絡めとられない援助は、贈与として援助を受ける者に与えられる。贈与を受け取った者は、心理的な負債感をもつこととなり反対給付の義務感に苛まれることになる。そこで、誰かに対して——つまり贈与を与えてくれた相手であるか否かに関わらず他者に対して——反対給付としての返礼を誘発することとなる。このように贈与と返礼は、等価交換として交換されるのではなく、援助者と被援助者、そしてその周りの人々の間で取り交わされることとなり、人と人との間につながりをもたらしことになる。このように贈与と返礼の無限の往還に参画することによって、援助者は贈与に対する返礼を受け取ることになる。この返礼が、それに対する反対給付としての贈与、すなわち「業務」に絡めとられない援助を起動することになるのである。被援助者の家族の一瞬の笑顔が、対人援助職にその存在価値を回復させることの理路は、このようにして求められるのではないだろうか。

また、レヴィ＝ストロースによれば、贈与と返礼の無限の往還は、贈与によって起動されるという。「痛みはどうですか。痛み止めは効きますか」という主治医の問いかけは、「痛みについての情報を提供してほしい」という提供を促すメッセージとして受け取られるがために、残念ながら贈与と返礼の往還は起動しない。一方、傾聴ボランティアがなぜメッセージを聴くことができるか。それは、傾聴ボランティアが来室したことが、そばに腰掛けてくれたことが、笑顔

生きる意味を回復するために

を向けてくれたことが、すでに「あなたの話を聴きますよ」というメッセージに他ならず、あなたの存在を受け入れますよという態度表明の贈与であるからである。この態度表明の贈与が、話すという返礼を起動することになる。

贈与と返礼の無限の往還の中でこそ、対人援助の専門家は生きる意味を回復することができる。交換価値と合理的な判断に基づく経済活動としてのみ対人援助がなされる限り、対人援助の専門職が必要な援助を探して行えば行こうほど、必要な援助が減少し、自らの存在価値が低減するという負のスパイラルに必然的に陥ってしまう。しかしながら、贈与と返礼の往還の中で対人援助を行うならば、自分にできる援助活動が見当たらないなどと嘆く必要はなくなる。贈与は返礼を起動し、返礼は贈与を誘発するのだから。

参考文献

- 内田樹, 2002, 『寝ながら学べる構造主義』 文藝春秋
内田樹, 2007, 『下流志向』 講談社
玉野和志 (編), 2008, 『ブリッジブック社会学』 信山社
畑村洋太郎, 2005, 『続 直観でわかる数学』 岩波書店

謝辞

本研究ノートは、2009年10月4日に行われた「NPO法人 対人援助・スピリチュアルケア研究会 第3回学術研究大会」において浅川が行った講演「生きる意味を回復するために—対人援助を社会学的に読み解く—」を基に執筆した。学術研究大会における活発な議論がこのような研究ノートを書く原動力となったことを、記して御礼申し上げたい。